
Persawr Stars ~ **星の香水** ~

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Persawr Stars 〉 星の香水 〉

【Nコード】

N4224S

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

迷いを持つ死した魂は、すぐに転生出来ない。世界に必ず1つは、存在する 狭間の世界。そこでは 迷いを持った魂を、導いていく 守人が存在する。彼らは、世界から遣わされた監視者。

ある少女

少女は、世界に絶望してしまった。

全が、少女から 大切なモノを奪っていく。

でも 諦めることが、出来なかったのだ。

人は、人を憎まずにいられないもの。

何かを成し遂げたのならば どこかで 成し得なかった者が、存在している。

誰かの恋が叶ったのならば どこかで 失恋している者が、いるのだ。

人は、誰かを目標にして 人生を歩む。

けれど すぐに 誰かを見限り 更に 陥れもするだろう。

信用しても 本心から 人を信じることは、出来ない。

最初から 人を信じなければ良かった。

傷つくことが、わかっていれば 元より 誰も信じなければ良かったのだ。

そうすれば こんなにも 絶望しなかったのかもしいのだから。

さようなら あたしは、もう この世界に未練が、ありません。

さようなら あたしは、旅立ちます。

少女は、躊躇することもなく その身を投げ出した。

すると 目に飛び込んだのは、絶景で 冷たい風が、突き刺さってくる。

そして 意識は、そのまま 闇の中へと沈んでいった……。

あたしは、今日もまた 与えられた 役割を担っていた。

それは、あたしに与えられた 大切な仕事。

様々な経緯で この狭間の世界にやって来た 人々を、あるべき道へと導くのだ。

ある者には、それまでの償いを受けさせるべく 罰を与え またある者には、来世へ続く 道へ進ませる。

あたしが 担当しているのは、物語の中に出てくるような ファンタジーな世界であり それと同時に 陰謀と策略に張り巡らされている時代……。

それから まるで 大昔の魍魎モウリョウに巢食ウケわれているような 欲望に満ちた 人達の争いだって あるのだ。

自分の置かれている 立ち位置を守る為 持てる武器を、何でも使っていく。

あたしは、そんな争いの中で 巻き込まれたりした 憐れな人達と 何度も出遭った。

そんな人達は、なぜ 自分が、この狭間の世界にやって来たのかも わかっていない人ばかりで 中には、まだ 世界の成り立ちさえ知

らない 幼い子供もいたし 権力には、縁のないような 純粋な心
を持った人もいる。

あたしは、そんな人達の心を導く中 世界が嫌いになっていた。

だって この役割を得てから どれだけの時間が経ったのかは、わ
からないけれど いつまでも その汚い世界は、変わってはく
れないのだから。

他の世界が、どんなのか 知らない。

だけど ここまで 酷いのかは、あたしに知る手段はなかった。

どんなに心が、荒んできても あたしは、世界に与えられた 仕事
をこなすだけだ。

これは、間違いなく あたしへの罰だから……………。

）
）
）
）

自己紹介が、遅れました。

あたしは、この狭間の世界の守人。

こことは、違う 異世界の住人でした。

今は、この狭間の世界の守人として 人々の死した 魂を導くのが、
この世界に与えられた 大切な役割。

償わなければならぬ 罪を清算する為 定められた 人の心を救
わないといけない。

全てが、終わって 許されるのかは、わからない。

けれど これは、誰かに決められたのではなくて 自分で決めたことなんだ。

人の心は、色々と難しい。

確かに そんな人達と関わることで 傷ついてしまうことだってある。

だけど 中には、温かい人の心もあるって事を知った。

だからこそ 世界を好きになりたいと思う。

どんなに汚い世界だって 清い心を持つ人が、少なからずいるのだから。

けれど 永い時が経っていくに連れて その想いが、踏みにじられていく。

信じよう と 思っているも 欲望に溺れた人達が、誰かを陥れる。そんな世界を見つめていると 悲しくて堪らなかつた。

どんなに世界が、希望を捨てるな と 慰めの言葉を投げかけてきても あたしの心は、死んでいく。

汚い世界は、どんな事をしたって 清浄なる 綺麗な世界になることは、ありえないのだから。

あたしは、こうして 1000年 狭間の世界での役割をこなした。その間 どれだけの人々の血が、流れ 穢れた 世界が、滅び 確立したのかは、数え切れない。

何度も 世界の破滅を目にしたこともあって その規則は、簡単に見えてくる。

そして 今 展開されている 世界も 近いうちに 滅んでしまっただろう。

今 成り立っている 国は、神の声により 全ての政策を行って

いく 世界。

王となつたのは、まだ 小さな子供だった。彼の母親は、元々 この国の王女だったが 平民の出だった 傭兵と駆け落ちしてしまつたらしい。

最初 王女の他に 王妃が生んだ他 側室達が、産み落とした 合計 10人もの王子・姫君が、いたため 彼女は、王族系図から 抹消されていた。

けれど 激しい跡目争いの結果 残された 王の血を受け継ぎし子供は、彼だけになつてしまつたのだ。

老いた 王は、欲目に駆られた 者達の争いを目にした中 幼き頃から 自分の内面を、愛してくれていた 我が子を思い出す。

けれど 時は、既に遅かつた。

王の忠臣が、駆け落ちした 王女と傭兵の男を見つけ出した時には、王女もその夫も 死んでしまつていたので。

残されていたのは、亡き王女の面影を持った 幼い少年。こうして 少年は、城へ迎え入れられたのだ。

当初は、下賤な生活を送つていた 彼を見下していた者達もいたものの 一部の心ある者達は、その王たる 器に気が付き 忠誠を誓うようになる。

けれど やはり 子供は、どこまでも 子供………。

欲に溺れた 人々は、幼き少年王を 自分達の傀儡操り人形にしようと 考へていた。

現に 跡目争いを陰で操つていたのは、何を隠そう 彼らなのだから。

自分達が、後見している王子や姫を 王座に就けるべく 人を使い争いを煽つていたので。

けれど 結果は、相打ちとなつてしまい 自分達の目的は、果たされなくなつてしまった。

どうしたものか と 思っていたところに 家系図から消された 王女の忘れ形見の発覚。

誰もが、一度 手にした 権力を取り戻したい。
こうして 王城内では、醜い 権力争いが、始まる。

世界は、何度 滅びれば 気が済むのだろう……。

もう チャンスなんて 与えなければいいのに……。

何度も、希望を持っても 裏切られるばかり……。

ならば 最初から 期待なんかしなければいい……。

どうせ 人は、欲望に負けてしまうのだから……。

今までだって 同じ事を、繰り返してきたんだ……。

どうせ 今回も、同じ 定めを^{運命}辿るに決まっている……。

だから 世界も、諦めるべきだ……。

こんな汚い 欲望に満ちた 世界なんか 切り捨てるべきなのに……

……。

なぜ いつまでも 信じる事が出来るの……？

世界は、一体 何を待っているのだろうか……。

一体世界は、何を与えたの？

世界は、何を与えたのか 何を求めているのかは、誰にもわからない。

けれど 人は、何度 滅んでも 同じ事を繰り返しても 何かを成し得ようとしてきた。

それが 関係しているのかは、誰にもわからない。

古きに渡る 血筋は、何度も 争いを好み 欲望のままに生きてきた。

その間 破滅への一手を辿り 世界は、何度も傷ついている。

もう 世界は、力を失い始めていた。

その綻びが、他の異なる世界と繋がってしまい 関係のない人達が、傷ついてしまっているのだ。

このままでは、この世界だけではなく 他の世界も巻き込んだ大きな破滅が、待っているかもしれない。

そんなことになれば 何もかもが、おかしくなってしまう。

何とか 保っていたはずの均等も、崩れていく。

世界は、何を待っているの？

何に期待して 何を、与えたと？

破滅へのカウントダウンは、刻々と 近づいている。

狭間の世界……それは、どの世界にも 存在している 異空間のこと。

死んだ魂を導く為 設けられた 生と死の狭間に存在する 別空間だ。

そして 各世界に1人だけ 狭間に迷い込んでくる 魂を、あるべき場所へと導く存在 守人が、存在していた。

世界が、自ら 選出し選び抜いた 監視者だ。

男も女も 子供や大人に老人も、世界によって 監視者になっていく。

ただ 1つだけ 共通しているのは、守人に選ばれた 人々は、皆 世界の進む歴史を、感じ取る 手段を無意識に 身に付けていた。

ある者は、持って生まれた 手腕で 世界の成り立ちを研究し 迷いを持った魂を、導きながら 歴史の修正に努める者。

また ある者は、最初から 自分の姿を世界の人々に見せつけ 脅しに似た言葉とその驚異的な能力で 世界の繁栄を求める者。

中には、世界に干渉せず 人々の行いを見守る者も……。

監視者の任期は、狭間の世界の感覚で 1000年単位だ。

狭間こゝの世界では、時間の流れが生こゝの世界と違っていて とても揺るかに流れる。

つまり 人の世界では、1000年以上もの時を監視しなければならぬ。

この狭間の世界に訪れる 人々は、目に見えない迷いを持っている。欺かれていた 事実を知ったり 知らなかった 想いと真意を知ることが出来たり…………、

迷いは、時に 更なる憎しみに変わることもあった、

勿論 憎しみの中に隠された 迷いが、全く 違うモノに変わることも…………。

様々な迷いは、世紀に渡る 人間相関図を制作できるだろう。

それだけ 醜い 欲望の中に入り混じった 権力争いの果ての魂が、訪れることが多いのだから。

勿論 中には、純粋な魂を持つ者も 存在していた。

けれど そんな彼らを圧迫してしまう位 穢れた魂が、多かつたのだ。

今日もまた そういった 欲望の塊が、狭間の世界へと足を踏み

入れる……。

「いいか?!」

ワシは、世界に必要な存在なのだツ!

こうしている間にも 馬鹿共が、とんでもない 発言をしているの
だろうからな?」

1人の年老いた 男が、鬼のような形相で 少女に詰め寄っていた。
けれど 彼女は、そんな事など 興味を持っていない。

「運命は、変わらない。」

アナタは、死んだ。

ここに来たという事は、迷いがあるから。

今の話から符合すると アナタの心配は、他の人達の発現について?

確かに 心配したくもなるかも……だって 暗殺されるくらいな
んだから」

少女の問いかけに 男は、唇を噛み締めている。

「油断してしまっただけだ。」

とにかく ワシを、生き返らしてくれツ!」

その発言に 少女は、”なぜ?”と 首を傾げた。

「アナタの運命は、既に 世界が受け入れた 真実だわ。」

だから この世界に足を踏み入れることも可能になったのだから」

男は、少女の揺るぎの無い 言葉に 息を呑んだ。

けれど すぐ 何かを思い出したかのように 叫び出す。

「そんなわけ ない!!!」

ワシは、知っているのだぞ?

過去 狭間（くわま）の世界を訪れた者の中に 生還を果たした者が、存在し
ていることを……。

その者は、書物で この世界の存在を残しているのだから」

「世界が、判断したのなら 生き返ることもあるかもしれない。けれど それは、余程の事が無い限り ありえないことだわ？」

その書物については、おそらく 前の任期の守人のしたこと。

他の人が、何を言ったのか知らないけど 世界の決めたことに文句を言わないで頂戴？」

ニツコリと 微笑みながら 少女は、言い放つ。

その表情に 男は、狼狽した。

本能で 何かを、感じ取ったのだろう。

「まずは、自己紹介をさせてもらうわね？」

あたしのことは、サーヤと呼んで？」

アナタの迷いは、本当に 生き残った人達の発言について？」

他には、何も無いの？」

例えば 残された 家族のことは？」

少女の指摘を聞いて 男は、固まる。

そして 何か思案するように 黙り込み 息をついた。

「ああ 確かに 心配じゃない と 言えば 嘘になる。

こんな薄汚い 爺かもしれないが 家族は、ワシと血が繋がっているのか 信じられない位 純粹なんだ」

どこか 遠くを見つめて呟く男に 少女は、苦笑する。

「なんだ……………自分で 迷いに気が付いているんじゃないの。

生き返りたい と すごい勢いだったのも 実は、ご家族のその後を知りたかったのね？」

納得している 少女の言葉に 男は、肩を竦めた。

「ワシは、昔から 人には言えない 卑劣なことをしてきた……………。家族は、何度 その報復で 命を狙われてきたか 数え切れん。

今回 ワシが、闇に葬られたのならば 家族にも、危険が迫ったのかも……………」

「ご家族は、無事よ。

元より アナタさえ 始末してしまえば 何とでもなる と思

われていたみたい」

サーヤの言葉に 男は、少し 胸を撫で下ろす。けれど まだ 不安は、消えていないらしい。

そんな男の心を読み取ったかのように 少女は、指を鳴らした。すると 何も無かったはずの空間に 突如 小さな戸棚が、出現する。

男は、ギョツと していたが サーヤは、気にも留めず 中から 何かを探し始めた。

「ああ……………これだわ？」

男は、不思議そうに 少女を見つめている。

もう その顔の中に 最初のような 必死な怒りは、ないものの 年齢に合った 年を取った男の顔だ。

「この瓶の中にある 香りを嗅いでみて？」

アナタの死後 ご家族が、どうなったのか 思い浮かんでくるから 差し出された 小瓶を手に取り 男は、目を瞑り 中の香りを嗅ぐ。

目に映り込んできたのは、自分に似た 面影の少年が、ガチガチになりながら 大きな部屋で 何かを待っている光景だった。

彼は、王族と謁見する為の礼服を身に着けており その顔は、真剣そのもの。

その隣では、清楚なドレス姿の大人になりかけた 少女が、少年を心配そうに見つめている。

2人は、しきりに 時間を気にしているようだ。

時間の流れは、わからないが ここにいる 2人に 男は、予感があつた。

<この2人は、アナタの孫よ>

守人の声が、どこからともなく 聞こえてくる。

どうやら 自分が殺されてから 随分 時間が経ってしまった時間のようだ。

あんなに小さかった 2人は、もう 立派になっている。

しばらくすると 部屋の扉が、開く。

入ってきたのは、少年よりも幼い 子供だった。

けれど 身に纏っている空気は、威圧感を持っている。

「お会いできて 光栄です」

2人は、彼が入ってくるなり すぐ 立ち上がって 膝を折り

礼儀を取った。

「あまり 堅苦しいのは、好きじゃない。

リラックスして欲しいんだ」

少年は、そんな2人に 何かを言葉を掛け 椅子に腰掛ける。

「さあ 本題に入ろう。

まずは、彼方方をお呼びした理由について。

別に 処罰とかではありません」

その言葉に 2人は、目をパチクリさせてしまう。

「まず 彼方方のお父上方のお祖父様 ハワード前侯爵の暗殺の真相について……………」。

世間一般では、王妃暗殺について 連行しようとしたところ 抵抗した為 手を下した と 言われていますね？」

その発言に 少年と少女だけでなく 部屋の隅に控えている 側仕え達も、息を呑んだ。

まさか 自分の暗殺の真相について こんな 小さな子供が話し出すなど 思いもしなかった。

しかも 自分は、王族殺しの汚名を着せられていたということに言葉が見つからない。

<この少年は、フローリア王女の実の息子よ。

アナタの死後 他の貴族達は、互いに陥れ合って 最終的には、皆 生き残れなかったの。

しかも 王族も、彼以外 全員が、権力争いの中で 散っていった>

それを聞いて 男は、目を大きく見開く。

もう一度 視線を集中させてみると 確かに 少年は、自分の記憶の中に存在する 可憐な息子の幼馴染を、連想させてくれる。

「ハワード候は、元々 第一王妃の産んだ王子を支援する位置にいた。

それが、第二王妃側に就いていた 侯爵の義理の弟君に 不利な状況を与えていたそうなのです」

少年の口調は、子供とは思えない位 流暢で 大人顔負けだ。

「そして 他にも、色々と恨みを抱いている貴族は、大勢痛そうです。

こんな中 持ち上がったのが、ハワード候の妹が、後宮入りするという話。

彼女が、王の寵愛を受ければ 更に 侯爵家の発言力は、強まる。

彼らは、何としても 侯爵家の力を削がなければいけないと考え始めた」

「だから 祖父は、殺されたということですか？」

緊張しているものの 孫は、しっかりと話す。

「本当は、他の家族諸共 強盗に見せかけて 殺す計画だったらしい。

だが 当日になって 侯爵は、突然 事前のスケジュールを前倒しにして 暗殺者達の計画は狂った。

だから 殺害対象になったのは、侯爵1人になったそうだ。

まあ 残された 君達には、反抗させない為 偽りの罪をなすりつけ 王都から追い出してしまったようだけれど」

「では……………祖父は、前・王妃様の暗殺の黒幕では、なかったのですね？」

その言葉に 少年は、”ええ”と 微笑む。

「この事実は、既に 王宮内の議題に上げています。

何人かは、渋っておりますが もう 後ろ指を差されることはありません」

少年の隣に控えている 少女に至っては、目頭にハンカチを当てて 泣き出しているようだ。

そして 3人が、部屋から退室すると 映像は、消え去った。

「子供達には、色々 苦勞をさせてしまったのか……」

男は、小瓶を片手に持って 悲しげに呟いた。

「確かに アナタの家族は、困難が続いていたわ。

けれど そのお陰で 忍耐力を手に入れた。

アナタの記憶の中にある 2人の孫は、あんなにも 意思をしつかりと 持っていた？」

サーヤの問いかけに ハワードは、苦笑する。

「ハロルドは、泣き虫で いつも 姉のカチュアのスカートの裾を離そうとしなかった。

カチュアは、レディに有るまじき行動ばかりするお転婆で 屋敷の中を散らかす天才だったんだ」

孫のことを思い出しながら 話す彼は、とても嬉しそうだ。

彼は、本当に 家族想いらしい。

「アナタに嗅いでもらったのは、世界の中に浸透していた 記憶と
という名の香水よ。」
パルフラム

今 本当に流れている時間は、もう 数年経っている。

この狭間の世界と現実の時の流れは、全く 違っているの。
でも アナタの家族は、あの小さな王子の後見を任された。

彼もまた 孤独と戦っている 1人。

自分なりに 信頼できる相手を、見つけ出しているわ」

ハワード候は、それを聞いて 安堵の顔になった。

「それだけ聞ければ 後は、迷いが無い。

家族が 苦勞したことは、悲しいが 希望が見出せたのならば……

……

男は、ふと 言葉を切る。

それと同時に 体の内部から 光を発す。

光は、少しずつ 小さくなってゆき 手の上に 白い鍵だけが、残
った。

「その鍵は、アナタの次の行き先を示すモノ。

どこに向かうのかは、あたしも わからないわ」

サーヤの言葉に ハワード候は、頷く。

「狭間の世界の守人：サーヤ殿。

これからも ワシの生きた あの国を見守って欲しい」

男は、そう言い残すと 鍵を点に翳した。

すると 鍵は、再び 輝きだし ハワードは、その場から 消える。

「ルーディック・ハワード……次は、家族の為だけではなく 忠
義にも懸命なる 正義を持ってね」

サーヤの声が、誰もいない 狭間の中に響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4224s/>

Persawr Stars ~ 星の香水 ~

2011年9月1日04時51分発行